

創設 40 周年記念 会報『泉』2 号のご案内

当会は、昭和 53 年 (1978) 8 月 13 日に創設して 40 周年を迎えましたので、これを記念して会報『泉』2 号を発行いたしました。この会報の刊行に当たり、一読で終わるのではなく読み続けられる会報にしたいとの思いから、活動報告だけでなく史料として今後も利用されることを念頭に製作しました。

そこで、巻頭には今までほとんど知られなかった「木津晒」(きづざらし)と「山城判場」(やましろのはんば)について、新発見の史料を翻刻しました。

江戸時代の木津の産業は、木津川の河川港を利用した物流が大きな柱でしたが、もう一方で「木津晒」(麻織物)という織物産業が柱でした。江戸時代の百科事典である『和漢三才図会』には、晒布の産地として和州奈良、羽州最上、山州木津、等が載っており、「木津晒」という織物産業が近世木津の大きな産業であったことは確かです。

この、「木津晒」や「判場」についてはおぼろげな言い伝えしかなく、詳しい内容は全く知られていませんでした。木津晒は織れば商品として流通するのではなく、織り上がった木津晒には運上金(税金)が掛かり、運上金を支払えば木津晒に押印され、押印がない晒は販売できませんでした。この運上金を取って判を押すところを「判場」といいます。

山城国で織ったすべての晒に運上金を掛けるための場所を「山城判場」といい、その判場が木津にあったので「木津の判場」ともいいます。

この、判場は木津本町の 1 丁目の奈良街道に面した東側にあり、判場で判を押す責任者をハンジ(判治または判璽)といいます。また、山城判場を支配したのは木津燈籠寺町にお住いであった今井本家で、近世木津の最有力者の一軒であります。

「木津晒」は徳川幕府崩壊と同時に消滅しますが、その高い織りの技術は「相楽木綿」に綿々と引き継がれ、今日に至ったことは確かでしょう。

この他、「恭仁京の復元はなぜ難しいのか」、「鹿背山城の城整備の思い出」、「鹿背山城・城整備雑感」、「ふれあい文化講座の誕生」、「事業報告・事業計画」等も掲載しました。

記

創設 40 周年記念 会報『泉』2 号は 100 部限定販売 1 冊 900 円です。別途送料 100 円(ゆうメール 99 円+封筒代 1 円)引き取りの場合は送料はいりません
申し込み方法： 当会のホームページ 又は携帯 090-5129-8908 岩井まで連絡下さい

平成 31 年 1 月 15 日

木津の文化財と緑を守る会
会長 岩井 照 芳
〒619-0217
木津川市木津町南垣外 12 番地
0774-72-0014